

『山路の露』における浮舟の呼称表現

——『源氏物語』続編としての物語の方法——

岡 陽 子

はじめに

『山路の露』を一読して目に付くのは、浮舟に対する「姫君」という呼称の多さである。尼姿の浮舟がなぜ繰り返し「姫君」と呼ばれるのだろうか。

物語を読み解く際に、登場人物の呼称表現が重要な指標となることは、さまざま先行研究において指摘がある。呼称は待遇表現の一つであり、登場人物相互が、あるいは語り手が、その人物をどうとらえているかを端的に示すものである。『山路の露』における呼称は浮舟のどういう立場・待遇を示しているのか、またそれは『源氏物語』における浮舟の呼称とはどう関わるのか。

本稿では、『源氏物語』の続編としての位置を当初から意図していたと思われる『山路の露』がいかんにして新たな物語を構築したのか、その方法について呼称という側面から検討を試みる。なお本稿では、「人」のように一般化した表現を含め、浮舟を指すと考えられるも

のは全て扱うこととする。

『山路の露』における浮舟の呼称を物語の展開に沿って一覧したのが次頁の表である。以下、この表に基づいて検討をすすめる。なお、各用例の頭には表と対応した番号を付す。

①序

『山路の露』の発端では、『源氏物語』の続編としての位置付けが述べられている。これは、本来存した物語（Ⅱ語り手による物語）が書き付けられた本（Ⅱ「なにとなく筆のすさみに書をき侍る」）を見つけた書写者（Ⅱ書き手）が、内容についての弁明を述べるといふ、三重構造を持った特異なものである。

- (1) (2)これはかの光源氏の御末（世五郎の母の事也）の、かほる大将ときこえし御あたり（世五郎の母の事也）のことなれば、そのつゞきめいたるこそいとかたはらいたうつ（世五郎の母の事也）ましかれど、ゆめくさには侍らず、たゞかのをのゝ里人に、たづねあひたりしありさま、こなたかなたの御けしきくはしうみける人の、ゆめのやうなる御中の哀（世五郎の母の事也）に忍びがたくおぼえけるまゝに、なにとなく筆のすさみに書をき侍る、その人心にもさこそ人にはもらさざりけんを、かりそめなる旅（世五郎の母の事也）の空にて、ぬしさへはかなく成にければ、あだなる人のその行末をとふらはんとて、もしほ草かきあつめける、そとろことともみなえり出て、きやうのかみにすかせるつゝめに、これをみつけ、なにのきゝ所あるふしもなければども、はていかならんと思ひわたる人の

『山路の露』における浮舟の呼称一覧

(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)			
こ姫君	姫君	姫君	女	をこなふ人	人	まことにうしと思ひ給へりつる	姫君	女の御身	かのはかなかりし人	かのはかなかりしかけるふ	はていかならんと思ひわたる人	かのをのゝ里人	呼称	
常陸介	語り手	尼君たち	語り手	語り手	語り手	語り手	語り手	横川僧都	語り手	語り手	書き手	書き手	呼称者	
を回想	常陸介、浮舟	野	面	燕と浮舟の対	告	小君、燕に報	対面	浮舟、小君と	言葉をかける	僧都、浮舟に	のぶ	燕、浮舟をし	序	場面展開

(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)							
御かた	さうしみ	山里人	かれ	をのゝ山人	さはかりなる人	君	姫君	なき人	姫君	姫君							
下仕え	語り手	語り手	燕(心中)	燕(贈歌)	想)	勾宮(回)	語り手	語り手	母(回想)	語り手	語り手						
物	燕からの贈り	野へ訪れ	燕、適度に小	置を案ず	燕、浮舟の処	答	燕と浮舟の贈	しのぶ	勾宮、浮舟を	野	母帰京後の小	物	母からの贈り	面	母と浮舟の対	衣装を替える	尼君、浮舟の

行を成けるとみるばかりの、せめておかしさにのこしをきけるにやあらん（一オ・1、425頁）

ここで浮舟は「かの小野の里人」、「はていかならんと思ひわたる人」と呼ばれるが、いずれも書写者が視点に立っている。そしてこの二箇所は「かの「思ひわたる」とあり、（ずつと知りたいと思つていたあの浮舟の行方）」といった語り口になつてゐる。『源氏』世界を前提としつつも、それとは一線を画した人物、直接の関わりを持たない人物によつて『源氏』と序以下の物語（『山路の露』）とが相対的にとらえられてゐるといえよう。あくまで客観的に浮舟をとらえ、読み手と同じ視点を持つとするものと解せる。ただしここで「小野の里人」という呼称は、『源氏』本編はもとより、読者による呼称を記す系図類にも見られないものである。なぜ「手習の君」あるいは「東屋」「浮舟」といった通称³ではなく「小野の里人」なのか。それはここでの呼称者が序以下の物語本体の語り手ではなく、物語を書写した書き手であることに起因するものと思われるが、この点については物語全体の浮舟呼称を確認した上で改めて検討したい。

②薫の回想

序の直後、語り手による物語が始まると、まずは薫の状況とその心情が描かれる。

（3）かのはかなかりしかげろふの行を、ほのかにきつけ給てし後は、いかなりしことぞと御心にかゝらぬおりなくて、ありし

せうとのわらをば、其後もたびくつかはしき（一ウ・4、425頁）

ここではまず「かのはかなかりし蜻蛉」とあり、序と同じく「かの」という形で呼ばれるものの、「蜻蛉」という『源氏』における薫詠、ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ（蜻蛉⑥二七³）

に含まれた浮舟の譬喩表現が用いられている点で序とは異なる。これはたとへば『源氏』空蟬巻における

空蟬の身をかへてける木のものになほ人がらのなつかしきかな
空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな

（空蟬①二二九、一三二）

に含まれた「空蟬」という譬喩が、後の末摘花巻において

かの空蟬を、ものをりをりには、ねたう思し出づ。

（末摘花①二六六）

という形で呼称として利用されているのと通じるものがあると思われる。すなわち、一つの物語としての『源氏』との連関が意識されているといえよう。序とは異なり、呼称者が語り手である「こなたかなたの御けしきくはしうみける人」（一オ・5、425頁）、すなわち『源氏』世界をも経験したと思われる人物だからこそなしようのであり、『源氏』本編を強く想起させるための表現であると考えられる。以下の物語展開において『源氏』における浮舟の譬喩表現が用いられることは皆無であり、あくまでこは語り始めゆえの、読み手を物語に引き込むための表現と見るべきであろう。それは次に見える

呼称との差異によつても明らかである。

(4) はぎの御ぞに、しをんいろのこうちきなど、なまめかしうきなし給て、そひふし給へる御さまいとめでたう、御ぐしのみよみすぢなく、なびきかゝりたるすそのそぎめなど、うつくしうみえ給ふにも、かのはかなかりし人は、けぢかくあいぎやうつき

たるかたは、まさりてさへ思ひ出られ給ふ(二ウ・4、426頁)

ここでは「かのはかなかりし人」とあり、先の「かのはかなかりし蜻蛉」と共通の修飾表現を持つ。異なるのは「人」か「蜻蛉」かという点であるが、この場面は「萩の御衣に」以下女二の宮の優美な様子を描写した後、それを見るにつけ「かのはかなかりし人」浮舟のことを改めて好意的に評価する薫の心情を描いている。女二の宮と浮舟とを対比し両者を客観的にとらえていると見てよいだろう。ここで本物語における浮舟の「人」呼称について確認しておく、全六例見える。このうち一例は先に見たように書き手による呼称であるため例外とすると、他には次のような箇所が挙げられる。

(7) さしもあらぬさまにきこえなしてよとて、まことにうしと思ひ

給へりつる人の御おもかげ、哀に心ぐるしう思出られて、しばしためらはるれば、つゐにかくれなからんものゆへ、ことたがひてはあしかりな思て、有つるさまこまかに聞ゆ

(二〇オ・11、432頁)

(8) こなたは佛の御前なるべし、みやうがうのかいとしみふかくかほり出て、たゞこのはしつかたに、をこなふ人あるにや、経の

まきかへさるゝをとも、しのびやかにつかしくきこえて、しめぐゝともの哀なるに(二三オ・4、434頁)

(15) されどたゞ一すぢになき人とのみ思しを、かくて思のほか

二たびたいめんしゆる悦に、よろづは何かはとなくさみ侍るなど、かきくどき給へば(二八ウ・11、446頁)

(18) 宮もうちうちにおりに、さばかりなる人もありがたかめる

をと、覚し出ることとはたえね共、そのすぢばかりのことはかけてもなし(三四オ・9、450頁)

(8) は小野を訪れた薫がひそんで室内の様子をうかがう場面。この時点では浮舟であると判断できていないため、「行ふ人あるにや」と推量表現が付加されているが、それは言い換えれば薫にとつて特別な待遇表現ができない、客観的にとらえた状態であるといえよう。(15)

は「亡き人」すなわち現世では会えない、別世界の人として母北の方からとらえられたものである。(18)ではその直後に「その筋ばかりのことはかけてもなし」と語られ、浮舟の想い出ばかりにひたるのではない匂宮の様子が示される。その移り気な様子は、続く一文で宮の君に思いを寄せさらに飽きてしまったという現状が描かれていることさらに強く読み手に印象づけられる。その匂宮によって「さばかりなる人」と称されるのは、「思し出づる」ことは絶えないといえ、すでにかげ離れた存在として意識されていると見てよいだろう。これらを考え合わせると、『山路の露』において浮舟が「人」と称されるのは、呼称者から一定の距離感をもって客観視されている

場合だといえよう。(7)はやや判断しがたいが、小野から帰京した小君は逡巡のち結局薫を優先し、浮舟の動向を語ってしまふ。ここですでに浮舟に対し一步離れた思いを持ち薫側に立っている小君の心情に寄り添い、語り手は浮舟を「人」と客観的に表現したと見ることができようか。

さてこれらをふまえて(4)にもとると、やはりここでは浮舟を客観的にとらえている薫の心情をこの呼称が示していると見てよいだろう。すなわち、(3)「かのはかなかりし蜻蛉」、(4)「かのはかなかりし人」と連続するこれらの呼称は、(3)は語り手による物語への導入、(4)は薫の心的距離の形容という、それぞれ異なる役割を担わされた表現であると考えられるのである。夢浮橋巻以来、浮舟を求め続け薫であるが、『山路の露』の始まりにおいてはあくまで「人」と客観的に浮舟をとらえている点は注目される。

③僧都との対面

次に示すのは、『山路の露』において初めて浮舟自身の姿が描かれる、横川僧都との対面場面である。

(5)大將殿の御ありさまは、つきなきほうしばらなどだに、なれ聞えまほしうみだてまつるに、さばかりあさからぬ御心ざしに、たづねおぼしたるに、女の御身には、くひおぼす御心がならず、出きなんど、あいなう思給ひなげれば、るに、御心みだれ給はざる、いとめでたき御事なり、三世の諸仏もいかにあはれ

み給らんなど、ことくしくの給なすに(四オ・2、427頁)

僧都は「女の御身には悔いおぼす御心必ず出で来なん」と思つていたことを語る。ここでは必ずしも浮舟個人に限定するものではなく、一般的な女性を示しているとも考えられるが、その前提として「さばかり浅からぬ御心ざしに、尋ねおぼしたるに」と薫の浮舟捜索を語っていることから、ここで直接に指し示す相手は浮舟ととらえられるため呼称の一つとして取り上げておく。

この「女の御身」という表現は、『源氏』における同じ横川僧都の思いを承けていると考えられる。

「まだいとい行く先遠げなる御ほどに、いかでか、ひたみちにかは思したたむ。かへりて罪あることなり。思ひたちて、心を起こしたまふほどは強く思せど、年月経れば、女の御身といふもの、いとたいだいしきものになん」とのたまへば、(下略)

(手習⑥三三五)

出家を懇願する浮舟に対し僧都が思いとどまらせようとする箇所である。「新編全集」頭注で「女には五障があること」と説明がなされているように、ここでは女性の罪障の深さを思う僧都の、浮舟出家後の翻心への不安が述べられている。また夢浮橋巻で薫の来訪を受け、浮舟への仲介を頼まれた僧都は

かたちを変へ、世を背ききととおぼえたれど、髪、鬘を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身はいかがあらん、いとほしく、罪得ぬべきわざにもあるべきかな

と、あぢきなく心乱れぬ。(夢浮橋⑥三七九)

と、法師ですら煩惱が断ち切れぬ者もいるのにまして女性ではどうなるか、と危惧する。『山路の露』における(5)破線部はまさにこの時の思いが回想され僧都自身の口から語られていると見てよいだろう。そしてここではその直後に「御心乱れ給はざる、いとめでたき御事なり、三世の諸仏もいかにあはれみ給ふらん」とあり、薫の使者を迎えてもなお心を動かさぬ浮舟の姿からかつての不安が杞憂であったことを喜び、浮舟を賛美する表現となっている。すなわちここで罪障深い女性の身という浮舟の「女性」性が『源氏』を承けて強調されればされるほど、現在の道心を貫く姿が賞賛の対象として高められることになるのである。僧都からも賛美されるほどの求道者として浮舟は物語に登場していることがわかる。

④薫との対面

ところが薫と対面することにより、その呼称は同じ「女性」性を意識しつつ大きく変化を見せる。

(9) たゞかのむかひに峯の松、風は鹿のぬびとぎぞへたるほど、すこきくわたされてものがなしきに、ながむる庭の草むらは、露のみ玉かとみがきつゝ、すみ行月は、秋をうれへがほなる虫のこゑなど、とりあつめ哀をつくしたる所のさまなるに、世のつねのまねなる中の行あひだにも、おほく哀もそひぬべきを、

此世にはいかで夢にだに、さだかにはみがたかりしおもかげを、

たゞそれながらあひむかひ給へるあはれは、いかでなのめならんまたかゝるためしあらしかと、たえずをしのごい給へる御袖の匂ひ、此世のものともおぼえず、くまなき月のひかりに、所からいとよいふよしなく、なまめかしくみえ給ふ、女もさこそいへ思しり給ければ、大かたはなつかしく、心ふかくたらひ給ながら、さこそあれ、なま心ぎたなきかたうちませなどもし給はぬを、人にはことに有がたく思しられつゝ、すこし哀もまさりけんかし(一六ウ・4、436頁)

ここで語り手は浮舟を「女」と呼ぶ。『山路の露』における「女」呼称は、物語全体を通じてこの一例のみである。この「女」呼称については、多くの物語研究で、「物語の逢瀬の場面などで、その男女関係を強調するために『をんな』の呼称を用いることも多い」との指摘がなされている。この場面もまさにそれが適用されていると見てよいだろう。語り手は破線部ア、イのように自然描写を多く取り込み「哀れ」の語を多用する。二人を取り巻く自然が感情を盛り上げていくのである。その中で浮舟は「女」と呼ばれ、薫の様子を見るにつけ「人にはことに有りがく」思い知る。ここでの「人」は世間一般の男性ということであるが、直接的に浮舟に想起されるのはやはり句宮ということになる。薫と浮舟との関係が「女」呼称によつて強調され、その一方で句宮の存在は客観的な「人」呼称により遠ざけられていくのである。

土方洋一氏は、『山路の露』における薫と浮舟に対する「語りの焦

点化」を指摘され、

宇治十帖で展開されていた様々な物語をすべて継承しようとはせずに、その後の薫と浮舟との関係に絞りに絞って語り継いでいこうとする限定的な姿勢がとられている。こうした限定的な語りの視座が、一方では薫の性格を単純化し、その一方では匂宮を殆ど黙殺するという傾向をもたらしていると考えるべきであろう。

と述べておられる。匂宮を排除し薫と浮舟を「焦点化」する『山路の露』の方法の一つがこの「女」呼称であるとして見てよいのではない。さらに言えば、この場面をはじめとして本物語において薫が「男」と呼ばれることはない。あくまで浮舟の心の揺らぎに語り手の注意が向けられているといえよう。物語登場において求道者として描かれていたがゆえに、その揺らぎはさらに強く印象づけられる。

⑤母との対面と下山拒否

では薫以外の人々との関わりにおいてはどうか描かれるだろうか。物語展開としては前後するが、弟小君との対面場面がある。

(6)いとさゞやかにおかしげなるさま、むかしながらのおもかげ、露ばかりたがはぬ物から、御ぐしなどの、ありしにもあらぬをみるに、ゆめかなにぞとかなしくて、よゝとなきぬたり、**〔姫君〕**も打わすれつるむかしのこと共、今更覚し出られて、まづ母君の行ゑとはまほしけれど、うち出給べき言の葉もおほえず

(七才・7、429頁)

ここで浮舟は出家者であるにも関わらず「姫君」と呼ばれる。この呼称は次に示すように、物語全体を通して全六例見られるものであり、浮舟呼称の四分の一以上を占めていることになる。

(10)例の色めいたるさしすぎ人共は、**〔姫君〕**のうちとけたりつる御さまを、いかに見きこえ給らん、かかりける御こと共に、やついでしてしことこそ、今更口おしけれなどいひて、そなたのとをり

の御かうしほそめてのぞきければ(一七才・10、437頁)

(11)みやこの人だになをいときせせず、めづらかなることにめできこゆる御さまなれば、ましてなにはかりのこともなき、むこの中将をのみ、山ざとのひかりに思あへるころどもには、おどろおどろしくめで聞え侍るも、ことはりなるかたも有かし、**〔君〕**はなにとなくつゝましき心ちして、いとゞきやうにのみまぎらはしてゐ給へるに、いつしか御文有(一九才・5、438頁)

(13)あまぎみかひくしきほんじやうにて、さるべき所とかくひきつくるひなどして入給へり、**〔姫君〕**にもかひなき墨ぞめなれど、あざやかな、まして今いかにみつけきこえ給てん、人の御心のうち、思ひやるこそいみじけれどとて、打なき給(二六才・4、444頁)

(14)母君うちみるより心まどひして、物もおほえねば、たゞむせかへるばかりなり、いく程のとし月もへだちらねど、ありしにもあらずおとろへて、さしもきよげにふとり過たりし人の、おもがはりするまで成にけるをみ給ふに、**〔姫君〕**の心のうち、たゞ我

ゆへならんかしと、つみえがましく覺ししられて、いみじうなき給(二六ウ・3、44頁)

(16) みやくこともなにかさのみ人めしげう侍らん、ことさら山里び

てつくらせ侍べきなど、御心につくさまにきこえなすも哀なり、

さましくなるきぬあやなどもたせたりける、とりいで、**姫君**

の御れうはさらにもいはず、尼君にも所せきまで奉りたれば、

又なき身によるこびさはぎて、物さびしき尼君どもなど、めさ

めたる心ちなんしける(三三オ・3、44頁)

『源氏』全体を眺めてみても、浮舟以外の出家者が「姫君」と呼ばれる例は見えない。『山路の露』において浮舟はなぜこれほど執拗に

「姫君」と呼ばなければならないのだろうか。

それを解決するために、まずは『源氏』における浮舟の「姫君」

呼称の様相を確認しておきたい。小野において浮舟が「姫君」と呼

ばれるのは、手習巻四例、夢浮橋巻二例である。手習巻は出家前の

呼称となるが、小野の人々にとつて浮舟は素性不明であり、「姫君」

呼称が不適当な存在であることには変わりない。にも関わらず浮舟

は「姫君」と呼ばれ、その原因として指摘されているのが、小野妹

尼の娘婿である中将との恋愛関係の想定である。中将の恋愛対象と

して期待する周囲の思惑を反映したのが「姫君」呼称なのであった。

その後、出家を果たした浮舟はいったん「姫君」とは呼ばれなく

なる。尼となることにより恋愛対象とは見なされなくなったからで

ある。ところが夢浮橋巻における横川僧都から小野への手紙におい

て再びその呼称は復活する。

昨夜、大将殿の御使にて、小君や参でたまへりし。事の心うけ

たまはりしに、あぢきなく、かへりて臆しはべりてなむと姫君

に聞こえたまへ。みづから聞こえさすべきことも多かれど、今

日明日過ぐしてさぶらふべし。(夢浮橋⑥三八五)

文とり入れて見れば、「入道の姫君の御方に。山より」とて、名

書きたまへり。(夢浮橋⑥三八六)

薫の来訪を受けて事の次第を知った僧都は二通の手紙いずれにも「姫君」と記す。先の手習巻での呼称が中将との恋愛関係の想定だとす

れば、ここは薫との男女関係復活の可能性が示唆されていると見る

べきではないだろうか。そしてそれを承けたのが『山路の露』にお

ける一連の「姫君」呼称であるとは考えられないか。

まず(6)は薫の使者として来訪した小君との対面場面。そして(10)で

はまさに薫との対面をのぞき見る尼君たちが浮舟の尼姿を悔やむ視

線が、また(11)は薫を賞賛する尼君たちの思いが、それぞれ描かれる

と同時に「姫君」呼称が表れる。これら前半の三例はいずれも薫と

密接に関わっており、男女関係の復活を望む者たちの思いに沿った

呼称であるといえよう。

それに対し後半の三例はいずれも母との対面場面である。(13)では

尼君が破線部のように浮舟の衣の色を嘆き、着替えさせる。もちろ

ん俗人のような衣を着せるわけにはいかないが、この行動そのものは

還俗させて普通の「姫君」としてみたいという思いの表れである

う。そして浮舟自身(14)において母の面変わりした姿を見るにつけ入水・出家というこれまでの自らの行動がその原因であらうと思ひ「罪得がましく」思ひ知る、その心情を描く際に「姫君」呼称が現れる。最後の(16)では、「かゝるさましたる人はわざとだにたへぬべき山の奥を分け出て、人目しげき住まひはうたてあらん」(三三ウ・10、449頁)と浮舟に下山を断られながらも、なお諦めずに帰京を勧める母の姿を描いた直後に「姫君」と呼ばれる。これら三例においては、尼君と母は現状の打開を望み、浮舟は出家したことによって引き起こした「罪」に思いを馳せ、三者いずれの立場からも帰京の可能性が見え隠れしているといつてよいだろう。そして帰京となれば当然薫との関係復活の可能性は高まる。すなわち、後半の「姫君」呼称もまた薫との男女関係の可能性を示唆するものと考えられるのである。

それは、最終的に「あらぬ世と思ひなしつる山の奥に何尋ねきて袖濡らすらん」(二三ウ・3、449頁)の歌を詠み下山の可能性を浮舟自ら絶つと、「君は例の後夜の行ひに心入れ給ふべし」(三三ウ・9、450頁)と「君」呼称に変化することからも明らかであろう。物語後続部分においてもはや「姫君」呼称が用いられることはない。

(22) 春をむかふべきころまうけの物ども、さま／＼こちたくて、うこんがころしらひのさまにて、こまかにおほしやりたれば、
れいのけざやかならぬあま君たちの心どもには、雪あられをわ
けたる御づかひの、あはれなるおりむしを、すぐし給はぬより、も
これをぶかき御こころさしのしるしに思ひふを、さうじみはか

たはらいたくきくしくしと思へり、母君の許よりも、よろづに
思いたらぬことなくて、あま君のかたまでとふらひきこゆれば、
まめやかにかすかなる身のたよりに、ほとけのみちびき給へる
なりけりと思悦よろこ 給ふ、ましてはかなき下づかひなどは、此御みか
たの御とくといひ思て、まめに出入なにかやとしける
(三七オ・5、452頁)

贈り物を受け尼君たちが薫を「深き御心ざし」と賞賛する、その様子とともに描かれても「正身」「御方」と呼ばれるのである。(10)(11)との違いは明瞭であろう。浮舟側から男女関係復活の可能性は断ち切られたことが、呼称により示されていると考えられるのである。

⑥再会後の薫

では薫の側はどうであろうか。右近から母子再会の様をも聞いた後、浮舟に思いを馳せる中では次のような呼称が表れる。

(19) いかばかりながめわづらんかきくらし雪ふるころの、
をの山の山人人
(三六オ・3、451頁)

(21) 此御心ひとつにいとどかにて、
山里人山里人にもおほつかなからぬ
ほどに、をとづれ給つと、
(三七オ・1、452頁)

「小野の山人」「山里人」といずれも小野の住人であることが強調された呼称となっている。薫は浮舟の処置に迷いを見せる。

(20) さてもこれをいかにもてなさまし、心づからのことゝいひながら、思出なくて過にしなぐさめにも、いまだにさるかたにてあ

らせまほしきを、人しげきすまひは、**かれ**も思よらざめり、げにはた人も思ゆるしぬべかりしいにしへだに猶世のきこえをつゝみてこそ、おぼえぬ所に置たりしが、今さらもていでなん、人のものいひもかたかたあやしかりなん、さりとてかの山ふかきすまゐに、とちこめはてなんも心ぐるしきを、いかにせまし、ちかきわたりの山ざとをさるべくしなして、忍つゝわたしてんなど、心ひとつに覚しまうけながら、女宮の御ことを、たれもくゝ又なきことゝ思て、こちたき御いのりども、あたりくゝさるべきけいしなど、心のいとまなきころなれば、おりふしあしくて、いさゝかのことも、世のをときゝことくしくやなど、
覚しやすらふこそ、猶こりずまなる御心のどけさなれ

(三六オ・8、451頁)

長い逡巡であるが、結局京に引き取る決意はできず、「なほこりずまなる御心のどけさ」と語り手に評されることとなるのである。「かれ」と客観的に浮舟をとらえ、手元に引き取ることができない、すなわち現在のまま遠く小野に置いておくことしかできない薫の心情を吐露したのが(19)であり、そういった薫の意識を反映したのが語り手による(21)の呼称であったと読むことができよう。

そして、ここまでの語り手による物語全てを読み終えた存在として書き手がある。最終的に小野の住人として位置付けられた浮舟の物語一部始終を知った人物であったからこそ、序において「浮舟」「手習の君」といった通称ではなく、「かの小野の里人」という呼称を用

いたのだと見ることができないだろうか。

おわりに

以上、浮舟呼称の変遷と物語におけるその意義を考察してきた。薫および母との再会に心揺らぎながらも最終的には浮舟自身で小野にとどまることを選び、薫もまた「心のどけさ」によって浮舟を引き取ることが出来ない——いわば夢浮橋巻での物語終結の妥当性を再確認する過程が『山路の露』の語りであり、それが端的に表れたのが浮舟の呼称であったと考えられる。

『山路の露』において呼称は、物語の方向性や登場人物の位置付けを示すために、一つ一つが周到に選び出されたものであった。それは、「姫君」呼称に顕著に表れていたように、『源氏』における浮舟とその呼称の有り様を利用しつつ、それを発展させ自在に配置することで新たな物語を紡いでいったのだといえる。『源氏』の続編として、『源氏』世界を継承しかつ新たな物語を形成していく、その物語展開の重要な方法の一つとして呼称をとらえることができよう。

◎『山路の露』本文の引用は、慶安三年改版本「絵入源氏物語」附録により、その所在を引用末尾の(一)内に丁数・表裏の別・鎌倉時代物語集成の頁数の順に記す。

【注】

(一)『源氏物語』における人物呼称については、田中恭子氏「源氏物語の人物造型における呼称の意義」(『根根慶子教授退官記念

寝覚物語対校 平安文学論集』昭50・風間書房)、長谷川成樹

氏「源氏物語の人物呼称―「姫君」について―」（『日本文学論集』第3号 昭54・3）など数多くの先行研究がある。なお浮舟に関しては阿久澤忠氏「源氏物語の呼称「姫君」―特に浮舟の場合―」（『創造と思考』第5号 平7・3）がある。

(2) たとえば九条家本古系図では「手習三君」と立項し、「あつまやの君ともうきふねとも」とある。また周知のように、『源氏物語』に近い時代の読者による呼称の例として、『更級日記』における「宇治の大将の浮舟の女君」が挙げられる。

(3) 以下、『源氏』本文の引用は「新編日本古典文学全集」による。

(4) 鈴木日出男氏「をんな」（秋山虔氏編『王朝語辞典』平12・東京大学出版会）。

(5) 土方洋一氏『山路の露』と物語史」（『年刊日本の文学』第3集 平6・有精堂）。

(6) なお、物語終盤、女二の宮の懷妊が伝えられる場面で「男君」という呼称が一例見える（三五才・6、451頁）。

(7) 他に(12)「故姫君」が一例見える（二三才・8、442頁）が、これは常陸介による回想の言葉の中で用いられたものであり、常陸介は蜻蛉巻において薫の関係を知らざれていることから、浮舟巻以前の薫との男女関係を意識した表現と考えられる。

(8) 長谷川氏前掲注(1)論文では「姫君」と呼ばれる条件として「一、父親が親王または公卿で母親もそれに釣り合う家柄の出である、ということ。二、多くは、母親を本位として長女で

あり、父親またはそれに代わる人物によってかしづかれている、ということ。（下略）」を挙げておられる。手習巻において浮舟の素性は不明であり、小野の人々にとつてこれらの条件を満たさない。なお、『山路の露』ではその素性は判明しており、基本的に地の文・会話文いずれにおいても敬語表現が用いられる。

(9) 手習巻における「姫君」呼称初出場面において「新編日本古典文学全集」頭注は「背景・人物ともに恋の条件が整ってきたからであろう」（③三〇六）と指摘する。また阿久澤氏前掲注(1)論文においても同様に論じられている。

(10) なお阿久澤氏前掲注(1)論文は、ある程度の血筋の判明およびかぐや姫との重ね合せをこの呼称の根拠として挙げられる。

(11) なお二類本はこの辺りまで補筆本文となっておりやや文章が異なるが、「ひめ君はなこりもこひしくうちなかめてさまくなりける身のありさまおほしつゝけて」とある（引用は尊経閣文庫蔵本による）。二類本の補筆・加筆には原形『山路の露』となくべく同化させようとする入念な姿勢が見える（拙稿『山路の露』二類本独自本文の生成とその性格」（『中古文学』第71号 平15・5）ため、ここは(10)(11)(13)(14)と類出する「姫君」呼称に合わせたものと考えられる（なお(16)は二類本欠落部分にあたる）が、本稿で見えてきたような物語全体の呼称の流れとは結果的にずれた用法となつてしまつている。

——おか・ようこ、広島大学大学院博士課程後期在学——